

生活誌から生誌へ

——ナツの暮らしたツバルと深いつながりの記——

小 林 誠

1. はじめに

文化人類学（以下、人類学）は対象となる現地社会で長期にわたってフィールドワークという調査をする。人類学者はただ単に長期間その場所にいるだけでなく、現地社会の人々とともに生活することで、より深くその人々について知ることができると考える。しかし、現地社会に長期間滞在して生活をともにし、その人々について知ろうとしてきたのは必ずしも人類学者に限られるわけではない。

もんでん奈津代さん（以下、現地での呼ばれ方であるナツ（Natu）と記す）は2004年から現在に至るまでポリネシアの小島嶼国ツバルに繰り返し長期間滞在し、人々の暮らしを書き記してきた。肩書きは南太平洋生活研究家・ツバル語通訳であるが、現在、大学や研究機関、学会に所属していない彼女は在野の研究者である。人類学者の調査であるフィールドワークとその成果である民族誌に関してはすでに人類学者自身によって批判的に検討されてきたが〔クリフォード・マークス（編）1996〕、彼女のような在野の研究者について人類学者はほとんど関心を払ってこなかった。

この点を踏まえて、本論ではナツがどのようにツバルを経験し、それをどのように記述してきたのかを詳細に検討し、人類学的フィールドワーク以外の現地社会のとらえ方を明らかにすることを目的とする。そのために本論では彼女が執筆してきたウェブサイトの記事¹⁾を詳細に検討するほか、エッセイ〔もんでん 2010〕、ツバル語の入門書〔もんでん 2008〕などの出版物、筆者が2017年9月と2018年7月に京都にある彼女の自宅で行なったインタビュー調査で得た情報を参照する。また、筆者が2008年にツバルでフィールドワークをした際にナツの暮らしの一端を見聞きした経験も本論に生かされている。

次節でナツの経験を位置づけるための背景的な情報を提示し、3節で彼女について簡単に紹介する。4節と5節で人や自然とのつながりという点に注目し、ナツがどのようにツバルを経験してきたのかを検討する。6節と7節で現地での記録の取り方と帰国後の記述に注目し、彼女がツバルをどのようにとらえてきたのかを明らかにする。

2. 背景

しばしば絶海の孤島とイメージされてきたのとは反対に、ツバルを含むポリネシアはそこに人々が初めて移り住んだ時から、人々が行き交う「島々の海 (a sea of islands)」[Hau'ofa 2008] だった。ポリネシアの人々は、別の島の人々と多様な関係性を育んできており、島々はそれぞれのやり方でそこを出自としない者を受け入れてきた。16 世紀におけるマゼランの太平洋横断、18 世紀におけるクックの探検航海の後、19 世紀のポリネシアでは島々の間を捕鯨船や交易船が活発に行き来していた。そうした中、船からの脱走や遭難によってヨーロッパ系の人々が島々に住み始めた。ビーチコーマー (beachcomber) と呼ばれる彼らは島の人々に友好的に受け入れられ、現地の女性と結婚しつつ、現地語と現地の社会・文化に精通することで西洋社会の仲介者としての役割を果たした [Campbell 1998]。

19 世紀以降になると、宣教師、植民地行政官などの外部社会と組織的なつながりを持った人々が島々に住み始めた。彼らの中には現地の社会・文化に関心を示し、民族誌的な記録を残す者もいた [例えば, Kennedy 1931]。太平洋戦争が終結し、ポリネシアの島々は 1960 年代から独立を達成していった。ツバルは 1978 年にイギリスの植民地から独立しており、その前後に多くの人類学者が長期のフィールドワークを行なっている [例えば, Chambers 1984; Besnier 2009]。2000 年代以降、ツバルは気候変動による「沈む島」として注目を集めたことを背景に、日本や欧米から観光者、自然科学系の研究者、NGO 駐在員などが首都に滞在するようになったほか、筆者を含め複数の人類学者が離島にてフィールドワークを行なってきた [Lazrus 2009; 荒木 2012; 小林 2018]。2012 年に行われたセンサス [GOT 2012]²⁾ では、ツバルの人口 (*de facto*) 10,782 人のうち、ツバル国籍以外の者は 225 人 (2.1%) に過ぎないが³⁾、首都フナフチ環礁においては、政府・援助関係の欧米人や台湾人、中国人・キリバス人商人、欧米日からの観光者などをみかけるのは珍しいことではない。

ツバルでは外来者をファカアロファ (*fakaalofa*) として受け入れる伝統がある。ファカアロファとは直訳すると「愛を与えるべき状態」で、もう少しこなれた日本語でいえば「かわいそう」という意味になるほか、外から来てその島に土地がない者をも意味する。かつて土地がないということは食べ物が入らないこと、そして、かわいそうであることとほぼ同じであった。そのため、島の伝統的な指導者である首長はファカアロファの世話をしてきた。現在では、離島においても小麦粉、米、缶詰などの食品を購入することもできるため、外来者は必ずしもかわいそうな存在というわけではなく、彼らを保護する必要性もかつてよりは低下している。それでも、離島では依然として外来者はファカアロファであるという考えと彼らを受け入れる伝統が残っている。ただし、現在では、首長が持つ影響力が低下してしまったこともあり、キリスト教の牧師や島の人々一般が代わりに外来者を受け入れることも多

い。

日本からポリネシアへの移住の歴史は長く、19世紀末から多くの日本人が経済的な動機に由来する出稼ぎ移民としてハワイを中心にポリネシアの島々に移り住んできた。日本から海外への出稼ぎ移民自体は1960年代まで続くが、1980年代以降になると今度は観光で海外を訪れる者が急増したほか、語学留学、ワーキングホリデー、リタイアメントなどで長期滞在する者も現れた。長友淳は、現代の中間層における経済的な動機以外での新たな移住をライフスタイル移住と呼び、個人の理想的な生き方を移住の動機とする点を特徴として指摘する。ライフスタイル移住の背景には、労働市場の流動化などの日本社会の構造の変化、それに伴う個人のライフコース選択の柔軟化、労働観・余暇観などの価値観の変化があり、日本の「居心地の悪さ」と海外の「住みやすさ」のイメージが海外への移住を後押ししてきたという〔長友 2015〕。

日本社会に生きづらさを感じ、そこからの脱出を目指すという点では、バックパッカーという観光にも共通している。大野哲也によれば、バックパッカーは、日本社会から抜け出して、異文化に浸りながら「自分探し」をすることで、自己成長と自己変革を経験するという。バックパッカーの大半は旅の経験を基に日本社会に再参入するが、なかには日本と現地社会を行き来しながら生活したり、どこにも本拠地を設けずに「旅を生き続ける」者もいるという。彼らは様々な現実と直面しながら、日本社会のやり方あるいは一つのやり方にしばられることから抜け出して、別の国、あるいは旅の中に居場所をみつけるという〔大野 2012〕。

後述するように、ナツもツバルに行く前にはバックパッカーとして旅をしてきた。そして、彼女が自分の娘と日本を離れることを後押ししたものの一つに、子連れバックパッカーが自らの経験を記した本がある。また、ナツがツバルに向かった理由の一つが日本社会での生きづらさの経験であり、滞在先で新たな生き方を見出していた点にライフスタイル移住者やバックパッカーとの類似性を見出すことができる。

他方で、現地社会のとらえ方という点ではナツは人類学者との類似性を指摘しうる。人類学者の調査であるフィールドワークでは、対象となる社会に長期間滞在し、その言語を習得するとともに、現地の人々と生活をともにすることで現地の社会や文化について知ろうとする。人類学者のフィールドワークでは、現地社会の人々の複雑な関係性の束に入り込みつつ、その中から社会や文化についての知識を得ようとする。ただし、人類学者のフィールドワークは現地社会を知るための方法であるのに対して、ナツの場合は現地で生活することが目的であるという側面もあり、人類学者よりも現地社会の人々と深いつながりの中に常に身を置いていると考えられる。この深いつながりの中で、ナツはどのようにツバルをとらえてきたのだろうか。

3. ナツ

ナツは2004年に初めてツバルの土を踏んでから、ツバルと日本を行ったり来たりしながら過ごしてきた。ツバルの長期滞在は、2006年の5ヶ月を除けば毎回9ヶ月ほどで、出発年だけみると2004年、2006年、2008年、2010年、2012年、2015年となっている。すなわち、1年弱ツバルに滞在し、1年強日本で過ごすということを15年ほど続けており、通算で4年強の滞在という計算になる。

自分自身のプロフィールの中で、彼女は「価値観が180°ごろんとひっくり返るような異文化との出会いが面白い」と書いている⁴⁾。しかし、意外にもナツが異文化への興味を強く意識したのはわりと遅い。1967年に生まれたナツは親の仕事の関係で関西地方を転々としながら過ごす。大学への進学を契機に東京に行き、卒業後、奈良の伝統工芸の会社に就職するが半年で辞めて、大阪のマーケティング会社にて広告企画を担当する。その後、英語教師、日本語教師、翻訳などの仕事をする。そんな中、深い意味はなくなんとなく行ったタイのピーピー島での人々の優しさに衝撃を受けて、異文化の面白さを知ったという。それから、仕事のかたわらインドネシアのバリ島、ソロモン諸島のマライタ島などへバックパッカーの旅をしてきた。ナツの旅はホームステイをして一緒に住む人々の「ナマの暮らしとともに体験」するものであった[もんでん 2010: 40]。

ナツの人生における大きな転機の一つが妊娠・出産であった⁵⁾。「南に移住したいから日本では家庭はいらない」と考えていた彼女であったが、ソロモン諸島に滞在中、日本から来た恋人との「夢中になるひととき」を経て帰国し、同居を始めて妊娠した。恋人の避妊に関する無知と無理解に立腹するものの、お腹の子どもを愛しく思い2000年に女の子を出産する。出産後、育児書を読み漁りながら子育てに奮闘し、自分の時間すべてを娘のために使うが、南の島への思いを捨て去ることができずに苦しむ。そんな中、カウンセラーとの会話などを経て、母親は子どもを第一に考えるべきという「風潮」を「問題」としてとらえ始め、次第に自分の時間のすべてを娘のために使うことから、「母親でも、好きなことは追いたい!」⁶⁾と考えを変え、英語の勉強を再開した。さらに、友人から送られた『ベビーパッカーで行こう』[おぐに 2000]という、子連れバックパッカーの本に後押しされ、1歳の娘を背中に背負いながら、ポリネシアのサモアに旅立った⁷⁾。サモアでの経験は子育てや家族のあり方、人と人とのつながりを考える上でナツの現在に大きな影響を与えるものであった。また、ホームステイをしながら現地の言葉を習得し、彼らの暮らしを記録し、それをウェブサイトで発信するという現在にまで続くスタイルは少なくともこのサモア滞在からみることができる。なお、サモアへは旅というよりも滞在であり、それを書いたものも「旅行記というより、ディープな暮らしの記」⁸⁾であると位置づけている。

『『太平洋の真ん中の島、海に見える家に住む』が、絶対かなえたい夢』だというナツは、その後サモアではなくツバルへの移住を考え始める。ツバルに初めて出発する前夜に書かれたウェブサイトの記事⁹⁾では、ツバルに心惹かれる様子（「どうしても、ツバルに行ってみたくなった」）、娘とともに行くことの不安（「4歳のあなたにとって、熱帯での生活が安全だなんて、誰にも保障できない」）、そして、固い意志の表明（「誰に非難されても、わたしはわたしの魂を揺さぶることを、力の限り、しているときにこそ、自分も、あなたも、心の底から愛せるのです」）、さらには自問自答と言葉にならない気持ち（「なぜ、ツバルなのか。さあ、なぜだろうー。魂がそうしたいから、としか、今はわかりません」）が渾然一体となっていて、旅立ち前の緊張感が伝わってくる。

ツバルについては次の二点に言及している。一点目はその小ささである¹⁰⁾。二点目は気候変動に起因する海面の上昇によって沈むとされることである。この点に関してナツは、ツバルの人々は「その日食べる分だけの魚をとり、限りなく自然と溶けあった、自給自足の暮らしをしている」にもかかわらず、「日本やアメリカ、オーストラリア…ツバルとはかけ離れた物質の溢れた国々が排出する二酸化炭素その他が原因の、地球温暖化によって」、「つまりは、このわたしの、暮らしによって。沈むかもしれない」と書いている¹¹⁾。被害者としてのツバルと加害者としての日本という図式は後で訂正し、問題の複雑さについて改めて問い直しているが¹²⁾、この時点では「沈む島」ツバルというイメージが彼女にあった。

2004年11月、ナツはツバルの首都フナフチ環礁に降り立つ。しかし、彼女は首都での暮らしに居心地の悪さを感じ、到着してわずか4日目に離島の一つであるバイツプ島行きの貨客船に乗り込んだ。バイツプを選んだ理由は特になく、「首都以外ならどこでもよかった。とにかく早く街の喧騒から脱出し」[もんでん 2010: 85]、ホームステイがしたかったのだという[もんでん 2010: 80]。バイツプでは、首都で泊まっていた宿主のイトコであるリセという女性の家族の世話になる。

バイツプで離島暮らしを楽しむ一方で、首都から近いためそこでの生活も「近代化」されたものであることに気づく。そこで彼女はより伝統的で、自給自足の生活が残っているというナヌマンガ島へ向かうことを考えた。一度、首都フナフチに戻り、4月にナヌマンガに渡り、そこである家族の世話になりながら、狩猟採集、漁撈、農耕などをして過ごしてきた。ナヌマンガではとりわけ、マット編み、草葺き屋根をはじめとする手工芸品の習得に力を注いできた。

ツバルで家族をえたナツは、その後、日本とツバルを行ったり来たりする生活を始める。日本に戻ってくる度に、その時の滞在について執筆し、写真やイラスト、漫画とともにウェブサイトにあげている。ナツはプロフィールに「描く」仕事が一番好きだと言っている。彼女のウェブサイトを見ると、生き生きとした漫画やイラストで溢れている。他方で、書く内容に自信がないこともあるが¹³⁾、サモアでの滞在から始まり、ツバルへ行くたびに彼女は毎

回、ウェブサイトにもいくつかの記事を書いて発信し続けてきた。それでも、日本では思うように時間が取れないこともあり¹⁴⁾、毎回のように彼女の記事は次のツバル行きのために執筆の途中で中断されている。

筆者の聞き取りによると、滞在中、ナツは聞き知ったことをメモに残し、それを毎晩、小型のノートにまとめ直しているという。彼女はツバル語の本を出版しているが、それは人々の会話を聞き取り、それを整理し直すことでできたものであり、そうやってナツはツバル語を学んでいった [もんでん 2008]。数十冊にもおよぶノートにはツバル語のほかにもツバルの伝統、慣習、神話、物質文化などがまとめられている。これらは貴重な一次資料であるが、日本の読者にとっては必ずしも興味を引く内容ではないという。他方で、ナツは週に何度か一人の時間を確保し、その時に自分が考えていることを別のノートに書き記している。彼女がウェブサイトの記事にすることが多いのはこちらの日々考えていることであるという。

4. 子ども、家族、島——人とのつながり

ナツは日本の子育てを取り巻く状況に苦悩し、それを乗り越えてサモアやツバルへと旅立った。そのため、サモアやツバルへはそれまでの旅とは異なり、幼い娘と一緒に「子連れの南の島暮らし」であった。そして、彼女は滞在先でまず先に子育ての違いを経験することになる。ツバルでナツが驚いたのは子どもの世話をするのが、母親だけに限られない点であった。離島行きの貨客船の中で、着いた先のバイツプ島やナヌマンガ島で、気がつくと自分の娘がたくさんの人々に抱かれ、ごはんを食べさせてもらい、シャワーを浴びて着替えさせてもらっていた。彼らは「自分の子供にする愛情表現と何のかわりもない態度を、今日知り合った子どもにとる」という。そして、彼らにとって他人の子どもの世話をすることはあまりにも当たり前のことであり、親がわざわざ「ありがとう」をいうことはないと感じる¹⁵⁾。ナツはいう。

「—誰が生み落とそうが、子どもは子ども。そこに居合わせた大人が目をかけて、安全を見守り、愛情をかけてやらなければ生きられない。だからそうすることは、そこにいる大人の自然な義務だ。—」。¹⁶⁾

そして、ナツもまた自分の娘以外の「自分の子供ではない子ども」のために、ごはんを食べさせたり、トイレに連れて行ったりと、様々な世話をしていた。ナツが滞在している家には子どもがたくさん集まる。彼女は夕方の水浴びの時間になると、自分の娘以外の子ども全員水浴びをさせ、石鹸で洗い、タオルで拭いてやり、手持ちの服を着せてやるというのが日常になっていった。また、貨客船に乗る時には他のツバルの人々のように余分にゴザや食べ

物を持っていき、他者を受け入れるスペースを確保するようになった。船でゴザを広げて寝ていると、隣のゴザの子どもが「当然のように」自分のゴザに入ってきて、となりで寝るので、ナツは自分が持っていた布をかけてあげる。また、朝になると娘と並んで子どもたちが待っているのでビスケットをあげると、「見知らぬ子ども達が遠慮なくほおぼる」。それを眺めていると、ナツは「一日本で育ったわたしの中の何かが―、ねじがゆるむようにゆっくりと変わっていくのを感じた」という¹⁷⁾。

日本でナツを苦しめたのはいわゆる「三歳児神話」であった。それは、子どもの成長にとって3歳までが非常に大切で、その時期までは母親が養育に専念する必要がある、そうしないと将来にわたって子どもの成長にゆがみをもたらすという考え方である¹⁸⁾。他方で、彼女は他人の世話をすると自分の時間が取られると考えていたため、娘に対しても早く自分のことができるようにと教えていた。彼女はいう。「他人の世話なんて大きらい。自分のことができない小さな子供なんて、あまり長い時間ともにしたくない。めんどくさい。わたしにはやりたいことがいっぱいあるのだ。ええい、自分のことぐらい、自分でやってくれ！」¹⁹⁾。

そんなナツがツバルで見出したのは「ひとの子ども」と「自分の子ども」を区別せず、大人が子どもの面倒を当たり前のようにみることであった。自分の子どもに全身全霊で愛情を注ぐことに疲れてツバルにきたナツであったが、ツバルで「ひとの子ども」を当たり前のように面倒をみることに充実感を感じる。それをナツは「日本にいて、忙しく自分の計画を遂行する生活の中では、なかなか感じるのが難しい、「今を生きている」というドクドクとした臨場感」と書く。

ナツは「「ひとの子ども」という概念の特殊性」と表現し、日本の常識を相対的にとらえる。彼女はいう。「それは、世界の観点から見ると、ある特定の文化にすぎないということ」。「全く違った常識というものも、この世界にはたくさんあるということ」²⁰⁾。ツバルの暮らしは「たくさんの大人が、いつもあたたかく見守っていて、いつでもどこでも、必要な食と、安全と、愛情を受けとることができる―」のであり、それは「子供の情操にとって、天国のような環境」である。他方で、「知らない人を警戒しなくてはいけないこの日本の街」は「子供の心を不自由に貧しくしてしまっている」のである²¹⁾。

ツバルの人々が受け入れるのは子どもだけでない。ナツは島の人々がいかに他者を受け入れるのかについても書いている。それが印象的に表れるのは彼女が初めてバイツプ島にきた時のことである。貨客船が着いた夜中の3時、首都の宿で紹介されたりセという女性の家に向かう。寝ていた彼女は何も事前に知らされていないにもかかわらず、外に出て来て、自己紹介をするナツをおもむろに抱きしめる。その時のことをナツは以下のように記している。

受け入れられた……！

船のガソリンの匂いの中で緊張していたわたしのからだは、さわわわあっととけていった。

初めて会ったこの人の、大きさと深さが伝わってきた。まだ何も会話はしてないけれど、わたしがまっすぐな思いで日本から子どもと来たというそれだけは、わかったようなのだ。そしてその長い道のりを、いたわってくれているのだ。ともかくもまず、心をあつためようとしてくれている。

これだ。これが南の島の、大好きなところなのだ。言葉や理屈より、心や気持ちをまず大切にする。ひとつ確かなことがわかれば、それでじゅうぶん。[もんでん 2010: 88]

受け入れてくれたのはリセだけではない。例えば、首都に住むファータシंगाという女性は、ナツがいつ訪ねても「ハウ（おいで）」といって家に迎え入れてくれ、楽しくおしゃべりをしたり、何か食べさせてくれたりする。また、忙しい仕事の合間をぬって、祭りで使うナツの衣装をつくってくれた²²⁾。彼女は親しみを込めてナツを「トク・タイナ（姉）」と呼ぶ。ナツはいう。

この国では、わたしの好きな優しいひとたちは目が合えばかならず「おいで」という。——どんなときでも、受け入れる——それが人に対する態度だという伝統が、この国にはある。[もんでん 2010: 152]

ナツの滞在はこうした人と人とのつながりの中にあつた。もちろん、日本でも人とのつながりはあるが、それは例えば母と子などのように狭い範囲で限定されたものであつた。他方のツバルでは、親子関係のみならず、家族・親族、島の人々、そしてナツたちのような外国人にまで広がる。こうした他者をも受け入れるつながりの広さと強さにナツは心を打たれ、そして安心感に包まれる。その意味でナツの滞在は、日本では失われていった人と人とのつながりをツバルで回復する物語として読み解くことができる。

この経験はナツの人間観を変えていく。ナツは自分が育った環境から、非常に否定的な人間観を持っているという。それは人間は「おろかな生物」だという言葉に要約されている。具体的なことは書かれていないが、ウェブサイトには例えば、「日本の街中でのそれまでの人生、わたしは人間が汚く見える悲しい体験を重ねては、打ちひしがれることもたびたびだった。そんな人間のひとりとして、生きる希望を失うこともあつた。」²³⁾とある。しかし、ナツは次のように書く。「けれども今。わたしはもう知っている。ひとは、こんなに美しいものだ」。「自然のまんまの人間は、こんなに力強く、こんなに美しいものなのだ」。ナツは「自然のまんま」の人間はとても美しいが、「街に住むとその美しさを失ってしまう」と

いう。この点について理解するために、次節では自然とのつながりという点を検討していきたい。

5. 海と陸——自然とのつながり

ナツには青い海に対する特別な思い出がある。彼女のプロフィールには「命の源である海の前になれば、カラダもココロも、すべて、ただの生物に、「戻れ」る」とある。ツバル滞在中、ナツは日課のように夕方になると家の側の海辺に行くという。彼女はそれを「地球につつまれに来る」、「すべてをすっかり、洗い流しに来る」、「一番深い底の自分に戻りに来る」と表現する²⁴⁾。ツバルの離島を初めて訪れてから何年たっても、海は彼女をとらえて離さない。それが最も現れているのが、以下の記事²⁵⁾である。

3年前、この広い玉砂利の海辺に来たとき。

生まれてはじめて 全身が周りに溶けていく そんな不思議な 感覚に襲われた。

「なにも、なんにも、 いない。」

そう感じた。

ここに来るために、今までずっと 生きてきたのだと 思った。

その後日本に帰っても。このナヌマンガ島の海辺が 恋しくて ただ恋しくて
胸が締めつけられた。

いつでも どこでも 何があっても わたしの身体の奥に この海がある。

わたしの魂は そこに帰る。

からだの奥で響く 果てしない波。 強烈な潮の匂い。

白い玉砂利の きゅっ、きゅっという 濡れた音。

それがわたしだ。²⁶⁾

ここに、海を感じるというよりも、海とつながる様子を読み取ることができる。彼女の全身は周りに溶けていって海に浸透している。他方で、彼女の体には海が浸透している。両者が区分はあいまいになり、相互に浸透することで、両者が溶け合っていくような感覚であろうか。

しかし、離島での生活の中で、ナツはしばしばこの感覚を忘れてしまう。ゆっくりと時間が流れるようにみえる離島であるが、祭りや冠婚葬祭の前にはその饗宴の準備で島全体が慌ただしくなる。ナヌマンガでナツは知り合いの女性のブライズメイドになる。ツバルでは結婚式の饗宴は何日間が続くが、特に初日は多くの人々を招き、大量の食べ物を用意する必要がある。ブライズメイドもその準備に駆り出され、ナツは疲労困憊しつつもみなで料理をし

続ける。もう限界だと思った彼女はそこを抜け出して海に出る。

白い玉砂利がどこまでも広がる浜と、世界の美しさを凝縮したような、青いあおい色の海。そのすべてがこのひととき、オレンジ色に変わる。幾千里の海を渡って、このからだを通る潮風で、すべてが洗い流される。ここに来ると、自分のいちばん深いところに戻れる。[もんでん 2010: 133]

この後、プライドと他のブライズメイドも浜辺に抜け出していたことに気づくが、ここでは人々が集まって共同で労働している場所から一人で海に出てきたという点に注目したい。海について書く時、その場所に遊んでいる子ども達がいることが示されるが、どこかそれは遠くから見つめるような眼差しである。また、誰かと海にくるのではなく、一人でいるような印象を受ける。むしろ彼女はそうした他者とのつながりを断って、自分の内側へと意識を向けているように感じる。そうして、彼女は静かに周りの世界に溶けていくのである。

海はナツにとって常に重要な存在である。他方で、ツバルでの滞在が長くなるに連れて、森や土などの陸に関する記述が増えていく。プロフィールにこそ表れないが、森に関する言及は最初の滞在においても表れる。例えば、初めてのツバル滞在を記した「2004年・2005年 初めてのツバル滞在実況写真」の中では森に出かけてラウルーという葉を摘み取り、野鳩を射止めてもらって食べたことが書かれている²⁷⁾。

ナツは土とのつながりについて以下のように書いている。

—わたしの命は、この大地と、直接つながっている—。

この安堵感は、自分で直接パパイヤをもいで、家の前の木になったブレッドフルーツを毎日食べるまで、分からなかった。「土とのつながり」が、人の精神をこんなにどっしりと安定させて、強くするとは…！²⁸⁾

土とのつながりは彼女に安心感を与えるが、それは海とは異なり、しばしば食べ物を介したものである。そのため、彼女は土に対して動的に働きかける。ナツはいう。

この島にわたし個人の土地はないけれども、ここに来れば、ブレッドフルーツを好きなだけ食べられる。パパイヤやバナナだって気のおもむくままに植えた。植えたときは、そりゃあ気持ちよかった。田舎を持つ人にとってはあたりまえの行為が、わたしにとっては、人生初めての、なんとも爽快で満ち足りた、深い感動だった。

パパイア、バナナ、ブレッドフルーツ。この家は豊かな実をつける木々に囲まれてい

る。朝起きて、そこにあるパパイアの木から熟れた実をもいで朝ごはんを食べる。それから目の前のブレッドフルーツの木に登って実をとって昼ごはんのために素焼きする。そんな暮らしが、わたしの身体と心にくれるこの安心感と喜び―。それは、いままで体験したことのないものだった。

「何なんだろう、このあふれるような充足感は。生きるってこんなに、単純で幸せなことだったんだ。これでよかったんだあ。」²⁹⁾

ナツは木を植え、それを収穫し、調理して食べる。この時、「わたしの命は、この大地と、直接つながっている」という「安堵感」に包まれる。他にもナツは、工芸品を通して、森とつながる。例えば、三日三晩、草ぶき屋根をつくるためファラという葉を縫い合わせた後、森の中を歩いていた時の気持ちを以下のように記している。

汗べっりのからだで黒い木々をかきわけながら。

はじめて、少しだけ、

ナヌマンガの森の

一部になれた気がした。³⁰⁾

海について語る時、ナツはただたずんでおり、静的で孤独であった。それとは対照的に土や森について語る時、彼女はとても動的で人々とともにいる。ナツはお世話になっている家族と森でカニを取ったり、野鳥を取ったり、フェロという木の実を取ったり、染色用のノニという木の根を掘ったり、小屋を建てるためのプアという木を切ったり、マットをつくるためにキエの葉を取ってその場でしごいたり、箒をつくるためにヤシの葉を切って葉芯を取ったりする。海はナツのモノローグであるが、森では人々とのやりとりの中にいる。

「のどが渴いたね。」

ばあちゃんの指図で わたしは起き上がり その辺におちているココナツから なるべく若いのを探してくる。

中のココナツ水が こぼれないように ナタで割るのは わたしにはまだできない。

ばあちゃんに渡す。

ふたり並んで ごくりごくりと飲み干した。ばあちゃんはわたしを見て にかあっと笑った。³¹⁾

土とのつながりを実感するナツは、自分自身の過去あるいは現在の日本への批判へと向かう。ナツは自分自身が「都会のアスファルトの上を学校に通い、一日中机で教科書と黒板を

睨み、家に帰っては、やっぱり本を読んだり絵を描いたりした」ことを「本や絵の空想の中でしか生きてこなかった」ととらえ、そのために「十代にして世界の重苦しさに息切れがし」、「二十代前半で摂食障害という精神疾患をわずらった」という。ナツだけでなく、現代の子ども達は「本やゲーム、アニメという虚構現実」のみが与えられており、それは「貨幣文明の、最大の被害者」だという³²⁾。彼女はいう。

この南の島で、からだで体験して分かったひとつの答え―。ただ、土とつながること。人間は土から実る植物（地域によっては、それらを食べる動物）なしには生きていけない動物だ。たとえ紙幣という紙切れで今日は飯に食べ物を得ることができても、それは脳ミソで考え出した人間界だけの約束ごとの上に成り立っている、頼りのない「命の安全」に過ぎない。この生命をつなぐ大地から身体が離れれば、おのずと不安を感じるように、人間という動物の本能はできているんだ―。³³⁾

ナツはこうした自然とのつながりが人の美しさをつくると考えるのである。アセナティという女性について、ナツは次のように描写する。

毎日、家の前の砂利に座って、ふたりでござを編むためのキエの葉の棘（とげ）とりをしながら、アセナティは何度もわたしに、こう語った。

「ナツ、ずううっとこの島に住みなよ。島の暮らしはいいよお。

こうやって、フアタンガ、パパイヤ、バナナ…。食べたもんの種を植えておけば、どんどん実がなって、いつだってボリッともいで、また食べられる。そうしてどれも、こんなにウマイ。こんだけいい暮らしは、都会にはないよお。―島は、ほんとうに、いいよお。」

褐色に輝いたアセナティの頬。そのキラキラ澄んだ瞳には、自然の中で、自然の恩恵によって生きる動物の、とてもシンプルで、満ち足りた輝きがあった。³⁴⁾

6. 記録から実践へ

こうした人や自然とのつながりの中で、ナツはツバルをどのようにとらえてきたのだろうか。まず現地での記録の取り方に注目して検討していこう。記録についての彼女の考え方は、2008年のナヌマンガ島滞在の後に記された「セメント大好き」という記事に端的に表れる。ナツは伝統的な生活を求めてツバルの離島のナヌマンガにまできたが、そこで彼女は伝統ではなく近代的な暮らしを求める現実と直面する。ある日、首都から来た貨客船から大量の建材が荷揚げされた。パンダナスや布で覆われたトイレを全てセメントのトイレにするという

のである。ナツは「パンダナスの葉っぱの壁は「みっともなく」見えて、セメント壁が「りっぱ」に映る」、「その感性もアメリカ・日本・オーストラリア…世界の先進国から取り入れたものだ」と指摘する。「新しいものが島にはいつてくるってのは、暮らしがよくなることだ!」という発言を自分は批判できないとしながらも、それでも彼女の胸は痛む。彼女はそうした変化を記録する必要性を感じる。彼女は書く。

今、この瞬間、自分にできることは一と思い返した。

記録道具を持つ今は、この島のすべての変化を記録してやろう。

フッとそう決めたあとは、ただ黙々とシャッターを切り、ビデオカメラをまわしていた。³⁵⁾

ナツが最も記録することに力を注いだものは伝統的な暮らしである。その背景には、彼女自身の興味関心もさることながら、それが失われつつあることへの危機感がある。とりわけ衝撃だったのは、彼女が愛していた伝統的な手工芸品の衰退であった。ナツがノニ（ヤエヤマオキ）の根を使った染色の仕方を習っていると、通りがかった女性たちに「あれえ、ナツ、懐かしいことやってるねえ」と声をかけられたという。前回滞在していた時にはこのノニを使った染色が広く行われていたが、この2年の間に化学染料が輸入されるようになり、人々はノニでの染色をやめていた。ナツは「過去にノニで染めたことのあるこの島の女たちの世代が年老いて死んだら、もう誰もキエの葉を、ノニの根っこでどうやって赤く染めるのか、知る人はいなくなるだろう」³⁶⁾と危惧する。

消えゆく工芸一。

わたしがこの島に通い始めた六年前からの島の変化をみても、それはまぎまぎとを感じる。その消えようとしている工芸に魅せられて、学ぼうとしているわたし。この島に伝わる模様編みごさを学ぶ外国人なんて、世界中でわたし、たったひとりしかいない。ツバル国外には、その存在さえ知られていないこの模様編みごさだ。

世界に知られないままに、いま、消えゆくこうとしているのだ。

それでも、まるでその消えていく足と競争するかのようになり、必死で、わたしはいま、学ぼうとしている。ひとりではその足を止めることはできないのに。一緒にノニの木を引っこ抜いたり、根っこをガリガリ削ったりしてくれる人がみんな死んでしまったら、誰もやり方を知らない島で、外国人ひとりでやることは難しいだろう。³⁷⁾

「誰もやり方を知らない島で、外国人ひとりでやることは難しい」ので、ナツは失われつ

つある伝統をそれが失われる前に記録しようとしてきた。ウェブサイトの記事からもその点を伺うことができ、例えば、マットの編み方はとりわけ詳細に記録されており、スケッチや、写真と解説によって編み方が一つ一つ丁寧に説明されている [図1 参照]。生活研究家としてのナツの真骨頂はこの詳細な記録であることは強調し過ぎることはないだろう。こうした記録は、ツバルの伝統、慣習、物質文化についての貴重な一次資料である。さらに、ナツにとって記録を残すことは自分の研究のみならず、ツバルの伝統を残すという点からも望ましいものであった。実現のめどは立っていないが、マットの編み方は英語にして公表することで、伝統を知らない若者なども簡単にアクセスできるようにすることも考えているという。

しかし、記録することに葛藤がなかったわけではない。記録することへのためらいはすで

● 「ピコピコ」の編み方 ●

この模様を編む工程すべてはあまりに複雑で説明が長くなるので、基本となる編み方だけをご説明します。

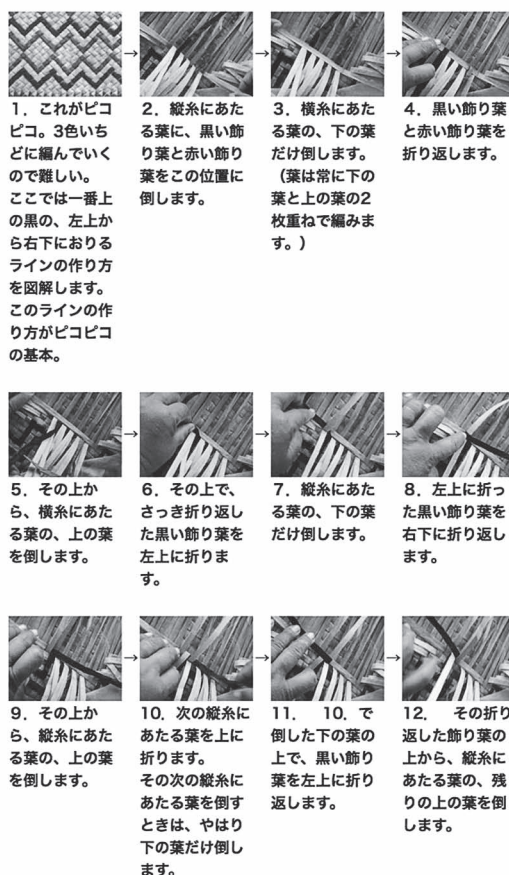


図1 ナツによる「ピコピコの編み方」³⁸⁾

に初めてのツバル滞在の時にもみられる。例えば、それはナニセニという男性の葬儀についての記事に表れる。生前ナニセニが働いていた発電所に娘が遊びに行き、そのまま一日中、世話になったことがあった。「誠実」で「朴訥」であった彼とはそのうちもっと話してみたいと思っていたが、病気で首都フナフチ環礁の病院へと運ばれ、1週間もしないうちに遺体となって再びナヌマンガに帰ってきた。ナツはナニセニの葬式について描写する。柩を囲んで泣く人々、賛美歌の合唱、弔問スピーチ、牧師の祈り。やがて、棺はトラックに乘せられて島の森の北にある墓場に運ばれて行き、土に埋められ、上からサンゴの石や白い砂利で覆われる。その上にはココヤシで小さな小屋が建てられるのがナヌマンガの伝統であるという。ナツはビデオを撮影しながらも賛美歌の美しさに魅せられて、次のように書いている。

わたしはビデオを回しながら、空に高く響く賛美歌のハーモニーに体を包まれて不思議な感覚だった。まるでビデオカメラの向こうのこの情景のほうがBGMで、賛美歌がたたえる神の国のほうがリアルなこの現場であるようだった。³⁹⁾

しかし、彼女はそこで記録する自分を意識する。ナツは記録する自分の居心地の悪さを以下のように表現している。

貴重な、ツバル北部ナヌマンガ島、人口500人の島の埋葬慣習。

それをビデオで撮っている自分が、とても浅はかな、薄っぺらい存在に感じた。ナニセニが死んだのに一。その埋葬の様子をナヌマンガ島の文化的資料として撮影しているのだ。⁴⁰⁾

とはいえ、その後、ナツは突然やってくる死への思索へと向かい、記録すること自体の是非をめぐる葛藤は後景に退く。そして、ナニセニの死を悼むというよりは、ツバルの葬式「ファーノアノア」の一般的な説明で締めくくる。ファーノアノアとは「悲しむ、悲しい」という意味で、葬儀をも意味することを説明した後に、遺体を囲んで泣く姿と賛美歌、埋葬の様子などが写真とともに解説され、移民が多いツバルでは遺体がなくても親族が集まって「祈りとごちそうだけ」の葬儀が行われるという。悲しい話題であるが、どこか突き放した感じがするのは、ナニセニの死を通してツバルの慣習を描写しようとしていたからであろう。

生活研究者として彼らの生活を知り、それを記録に残すことは至極重要なことである。しかし、記録を取ることは必ずしも彼らの生活を知るための有益な手段となるとはかぎらない。2008年のナヌマンガ島での滞在における「ござ編み」という記事⁴¹⁾をみてみよう。7月に行われる「おんなの祭り」のために、島の女たちは「上等な大判の装飾ござ」を、一人一枚編む必要がある。ナツが世話になっていた家でもマロソーばあちゃんは自分の分をやり終え、

今度は娘の分に取り掛かるところであった。ナツはマロソーからゴザの編み方を教えてもらおうとする。

わたしは手帳に、編み始めの手順を記録する。

マロソーばあちゃん、そんなことはおかまいなく、ひとりで編む手元をにらんでブツブツ。

「…どうだったっけ。このへん忘れたよ。ああ、まちがえてるよ…。あたしゃ頭悪いね。

ああ、こうだ。んで、こうして…。」

ストップをかけるわたし。「ちょっとそこ、待って！ メモとるから。」

ばあちゃん、うとうとしそう。

「こんなことは、何度もやってるうちに覚えるんだよ。書いてどうすんの。」

と、その顔が言っていた。⁴²⁾

必死で記録を取ろうとするナツとブツブツと話しながら作業を進めるマロソーの対比が描かれる。とはいえ、マロソーに嫌な顔をされているような気がしてもナツは記録することをやめない。同記事には、編み方のイラストが丁寧に描かれている [図2 参照]。

このように葛藤を抱えつつもナツは記録し続けていった。しかし、滞在が長くなるに従って記録よりも実践が重視されていく。例えば、ノニを使った染色についての記事⁴⁴⁾をみてみよう。染色をするためにまず森に行ってノニの根を掘り出し、それを家に持って帰る。ノニは外皮を取り除くと中から黄色い内皮が現れ、それを削り出していくが、ノニの根は固く、汗水たらして行う重労働である。こうして削った内皮に、サンゴを焼いてつくった消石灰を混ぜると黄色から赤に変色する。それを鍋で煮立てて、そこに葉を入れて煮詰めると赤く染

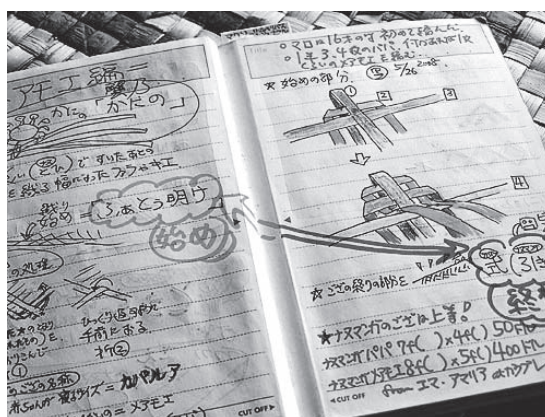


図2 ナツによるござ編みのノート⁴³⁾

まるのである。前回の滞在はカメラの撮影を優先して、自ら根を抜くことはなかったというが、2010年の滞在ではカメラを持たずに森に入って「汗水たらして引っこ抜いて回った」という。根を掘る作業から、削って煮出すまでの写真は以前に写したものになっており、手が泥だらけで真っ赤になってしまったとあり、記録よりも実践に重きが置かれていることが伺える。そして、そうした作業によってナツは恍惚に浸りつつ、「このノニの赤のために、何度もポタポタとたらしたあの汗がなかったら、こんなに全身が震えるほど嬉しくはなかっただろう」と書く。

もちろん、ナツはこれまでツバルでの暮らしを実践してこなかったわけではない。そもそも彼女の旅は、「ホームステイ」をして、一緒に住む人々の「ナマの暮らしをともに体験」することを目的としており [もんでん 2010: 40]、ツバル滞在中には世話になっている家族を中心にツバルの生活を実践してきた。とはいえ、やはり彼女の中には貴重な資料としてツバルの生活や伝統について記録しておくという点も常に存在し続けてきた。これが、2010年の滞在からより深くツバルの人々のやり方を実践することを意識的に目指し始める。それは家族のために生きるということである。ナツはいう。

でも、今回はツバルに来る前に決めていたことがあったのだ。

「自分のプロジェクト、『島の暮らしの学習』のことよりも、まずは、島の家族のためにはたらくことを優先してみよう。」

ごごの編み方、蟹の捕まえ方、草葺き屋根の組み方…まだまだ学びたいことは山ほどある。

でも6年前にわたしたち母娘が島に足を踏み入れたときから、島の人びとと自分には、根本的な違いを見ていた。その違いに、ことあるごとに驚かされた。日本で育ったわたしは、まず自分の計画のことを考える。でも島の人たちは、いつも当たり前のように、わたしたちのために時間をさいて何かをしてくれるのだ。

だから今回のテーマは、そういう「島の人たち方式」を、いちどすっかりやってみよう、ということだった。すると自分がどうなるか、実験してみたかった。⁴⁵⁾

ナツは滞在中、ファリアという女の子の世話をすることにした。彼女はほとんど話すことができないが、笑顔を絶やさず明るい子であった。ナツは彼女に水浴びをさせることにした。彼女は毎朝、毎夕、びしょびしょになりながらファリアの体を洗い、身体を拭いて、服を着せ、髪をといた。そして、マッサージもした。はじめ「めんどくさいなあ」、「朝晩、わたしかあ…。島のあちこちに出かけて人びとの暮らしを勉強する時間も、削られるなあ」と思っていたナツであるが、次第に彼女の世話をすることに喜びを見出すとともに、それによって自らが元気になっていることに気づく。「ファリアの水浴びマッサージをした後は、

生活誌から生誌へ ナツの暮らしたツバルと深いつながりの記

する前より、あきらかに自分が元気になっている。エネルギーが自分の足先まで、手の指先まで、流れてくるのをどくどくと感じる。まるで自分がマッサージしてもらったみたいだ。なんだろう、このみなぎるような、生き生きした感じは」⁴⁶⁾。

ナツは「ナヌマンガの女」になろうとしていた。かつて、自分が熱射病で熱にうなされた時、一晩中看病してくれたように、彼女は風邪をこじらせた家族を夜中、看病する。もっとも、「島の人たち方式」というのは必ずしも現在の彼らの生活をそのまま実践することではなく、「森の暮らし」などの消えゆくかつての伝統を実践することでもある。ナツは記録するだけでなく、自ら実践してみせることで消えゆく「森の暮らし」を守ろうとしていた。

キリキリと痛む胸の内にかみしめた。

—ああ、まず、ここにもっと住みたい、と。

そして電気やセメントを使うことを必要最低限にして、

パンダナス葉の屋根作りやココナツ拾い、あらゆる生きる技、うんと上達したい、と。

ここに住んで、自分の暮らしで語ることでしか、

ひとにもものは言えない。

たとえ若者たちに笑われても

悠然（ゆうぜん）と森の暮らしを営む

そんなナヌマンガのばあさんになりたい。⁴⁷⁾

7. 生活から生へ

現地での記録の取り方は現地社会との向き合い方の変化を表している。現地との向き合い方の変化は帰国後の記述内容の変化としても表れる。

ナツはこれまでツバルの社会・文化一般についてというよりは、日々の暮らしの中で見聞きした具体的な経験を書いてきた。ただし、ツバルに滞在し始めの頃は社会一般についても論じている。例えば、「社会学科」の「水」という記事では飲用水が地下水から雨水タンクへと変わってきて、それに伴いパンダナスの葉で葺いた屋根からトタンの屋根に変化したこと、首都の人口増と生活スタイルの変化が水不足の背景にあることを説明している⁴⁸⁾。とはいえ、それらも暮らしの中の具体的な経験に彩られている。例えば、水が希少なツバルでは桶にためて大切に使うが、茹でたうどんをつい流水で洗ってしまい、それを見たツバルの人々が絶句した様子が描かれている⁴⁹⁾。中でも圧巻なのは、水不足が続いていても底抜けに明るいツバルの人々が料理をしながら踊っている写真から始まり、突然の大雨に「マヌイア!! マヌイア〜！（やったあ!! めでたい〜!）」と大喜びする様子が伝えられる。その

後、雨漏りがしてしまい、ボタボタと寝床に雫が落ちてきたので、ガンガンとトタンの屋根を金槌で打って直したという⁵⁰⁾。

滞在が長くなるに連れて、経験の記述にも変化がみられる。この点について小屋を例にみていこう。2004年から2005年のバイツプ島滞在を受けて書かれた記事⁵¹⁾では、料理小屋(ファレ・ウム)が「料理・昼寝・各種作業・子供の遊び場」などの様々な使われ方をしていと説明される。料理小屋で看板描きの作業をしていること、子ども達が遊んでいる様子、乾燥したココナツを割っている様子、フォウという花冠をつくっている様子、ラウルーという葉っぱを使った料理やイサベという飛び魚やブレッドフルーツなどの食事の様子などが写真付きで紹介されている。また、同時期の滞在時の記録では村はずれの草ぶきの小屋に一人で住む老人との会話が書かれている。

「オシエ。村に住まないの？」とわたしは聞く。

「村はなあ…、騒がしいじゃろ。森は、静かじゃあ。海の波の音だけじゃ。

—森はいい。」⁵²⁾

この時期のナツのウェブサイトの説明には「ファインダーの向こうの、島の家族の生き様が偶然、一瞬にして写真の中に飛び込んできました」とあり、書かれた記事は人々の日々の生活を断片的に切り取ったものである。これが、滞在が長くなるにつれてナツとその家族の暮らしの一部として書かれていく。例えば、ナツは上述の小屋を気に入っていたが、オシエじいちゃんが亡くなってしまい、この家も荒れ果てて、雨漏りがするようになってしまった。2008年に滞在中、アセナティやマロソーとともにファラの葉を採取し、しごいて柔らかくし、20枚弱をひとまとまりにして縫い付け、屋根の上に葺くという一連の作業について書いている。これは非常に力を使う重労働であり、ナツは身体中が痛くなりながらも作業をする様子が綴られている⁵³⁾。

2011年にはナツの家族であるアセナティとその夫ウィニらとともにすでに珍しくなってしまった草ぶきの小屋を建てる。まず、森に入り、プアの木を切ってきて、皮を削り、数日間乾かす。その後、それを使って、小屋の骨組みをつくる。床はヤシの葉の軸を並べてつくり、ファラの葉で屋根を葺く。ナツは他の人の手元を見たり、過去のノートを見たりしながら、やり方を思い出しつつ、参加する。具体的な描写を通して現地での日常生活の一端を垣間見ることができる。それは、ナツが経験したツバルの暮らしについての記録であり、そうした意味でこれは生活について書かれたもの、すなわち生活誌と呼ぶことができるだろう。

ところが、2016年になるとナツの記述は人々の暮らしから離れていき、一人一人の生き方を伝える内容へと変化する。それまでもアセナティやマロソーなどの家族の人となりやナツとの関係を伝える記事もあったが、どちらかといえば彼女たちと過ごす日々の生活につい

での記述がメインであった。ところが、2016年の記事は「南の人名録」と名付けられており、冒頭で「ともに暮らすなかで生きることの美しさを教えてくれたツバルの、心から愛するひとり、ひとり」について書くと宣言されている。

取り上げた5人のうちの1人がシンガノという老人である。シンガノはナツと10年以上の付き合いで、娘がまだ小学生だった頃、毎日、迎えに行って面倒をみてもらっていた。出会った当時からすでに白髪であったが、体つきはたくましく、働き者で、カレベというヤシの樹液を取るために朝夕欠かさずヤシの木に登っていた。娘が成長した後も、ナツはフナフチに来るたびに欠かさずシンガノの家に通い、家族ぐるみの付き合いを続けてきた。しかし、2016年、シンガノはだいぶ弱っていた。ナツは書く。「小さくなったシンガノのからだは、光に揺れるハンモックにすっぽりと包まれていた。赤ん坊に戻ったような、清らかさだった」。「涙があふれた。わたしがまたツバルに戻るのはまだ先だ。そしてシンガノは、いま、逝こうとしている。シンガノの晩年の10年を、ときどき一緒にすごした。たくさんの、ツバルの知恵を教えてもらった。ツバル人らしいツバル人の美しさに心打たれた」。ナツはシンガノに「どうか、ゆっくり、ゆっくり休んでね。いままで、ずっと働いてきたから—」と語りかけ、しっかりと抱いてから別れた。日本に旅立つ前日だという⁵⁴⁾。

もう一人はモウカというナヌマンガの女性である。ナツは外国人に接した時のツバルの人々の対応を、無条件に笑顔で迎え入れてくれる「これぞ南の人びと」タイプと自国のプライドを大切に堅苦しい解説と渡航目的を詳しく聞く「政治家」タイプに分類する。ナツは「これぞ南の人びと」タイプの家族に受け入れられてきたので、「政治家」タイプだったモウカにとっても緊張したという。ナツは彼女に自分がツバルに来た目的を、「先進国日本社会には多くの問題が勃発している。犯罪・精神病理・自殺の多発、原発などの環境問題。それらの解決のヒントを、まだ狩猟採集が営まれているツバル離島伝統社会に探りに来ているのだ。そういうことを執筆したいのだ」と「大義名分的に」、しかし、誠意を持って説明したという。そんなモウカとも一緒に住むことになると、すっかりと打ち解けて気軽に話す関係になる⁵⁵⁾。

2016年に島に滞在した時、モウカは病気で食欲がなかった。より正確には輸入食品ではなく、「島のもの」を食べたがっていた。ちょうどナツは家族らと森に行き、フェロと呼ばれる木の実を採ってきていた。そして、それを茹でて潰してココナツなどとあえたファカハーカヴァ・フェロという料理をつくっていた。ナツはそれを持って行ってモウカに差し出した。「フェロを食べるかって？ あたしを何だと思ってるんだい。ナヌマンガ島人だよ」。モウカはうれしそうだった。それからナツは「島のもの」をつくってはモウカに届けた。

やがて、ナヌマンガを去る時がくる。モウカに別れの挨拶を行った時の様子をナツは以下のように描写している。

モウカは一なにも言わず、涙を出して、わたしにすがりついてきた。つりあがっていた眉がくちやくちの八の字になって、子どもの泣き顔になっていた。

わたしは、ちょっとたじろいだ。「威厳」を大事にするモウカが、こんなにくちやくちになってわたしにしがみついている。胸をつき上げるように溢れてくる、言葉にならないもの。「いとおしい」という感情はこういうのをいうんだろうか。モウカが、たまらなくいとおしかった。しっかりと抱き返した。モウカとわたしはほとんど言葉なく、ただ涙と身体で、別れを交わした⁵⁶⁾。

それが、モウカとの最後の別れになってしまった。ナツは首都のフナフチ環礁から帰国の飛行機に乗る前日にモウカの訃報を聞く。葬式に出席できないことを嘆きながらも、ナツは以下のように結んでいる。

「モウカ、ありがとう。ファカハーカヴァ・フェロをあんなに喜んで食べてくれて、ありがとう。

最後の別れ際だけ、子どもみたいな素顔をわたしに見せてくれて、ありがとう。』⁵⁷⁾

そこに表れるのはツバルの生活ではなく、ツバルで会った人々の生そのものをみつめるまなざしである。その人との出会いからどのような関係を取り結んでいったのか、そして、彼らとの別れ（の予感）が胸を打つ。もちろん、そこからツバルの離島がどのような場所で、人々がどのような生活をしているのかなどについてを読み解くこともできる。また、そもそもフェロやそれを使った料理がどういったものであるのかも説明されている。しかし、そうしたツバルの生活というのはあくまでもこの人の生を理解するための背景的な知識にすぎない。ここに人々の生活についての記述である生活誌から個々人の生についての記述である生誌 (biography) への転換を見出すことができる。

8. おわりに

以上、ポリネシア・ツバルに長期間滞在し、人々の暮らしをみつめてきたナツの経験と記述について検討してきた。ツバルでナツが経験したことは、日本において失われていた二つのつながり、すなわち人と人とのつながりと、人と自然とのつながりの回復であった。滞在中、ナツは海や森などの自然と、自分を受け入れてくれた家族や島の人々とともにあった。そうしたつながりの中でナツはツバルの暮らしを実践し、それを記録してきた。しかし、次第に彼女は記録を取ることもよりも、ツバルのやり方を実践することを優先し始める。もちろん、彼女は書くことをやめたわけではなかった。彼女は自分の考えをノートに書くために

「時に一人になる」というが、書くことは時にこのつながりから離れることでもあった。そのため、ナツはむしろこのつながりの中で生きることを目指し、ツバルのやり方を徹底して実践する方向へ向かった。

このつながりはまた、彼女の記述にも影響を与えた。滞在しはじめの頃はツバルの社会についての一般的な説明がみられたが、それはすぐにほとんどみられなくなり、人々の暮らしについての具体的な経験がメインになった。そして、具体的な経験もナツが見聞きした断片から、ナツとその家族の日常に埋め込まれた描写になっていった。さらに、近年では人々の暮らしはむしろ後景へと退き、個々人の生を描いている。現地での長期間にわたる深いつながりが、日常に埋め込まれた描写になり、そして、個々人の生の記述へと彼女を向かわせたのではないだろうか。本論ではそれを生活誌から生誌への転換ととらえた。

ナツは2018年10月初旬に再びツバルに戻った。今回の滞在でも、まずはナヌマンガの家族のところに行き、フアリアに水浴びをさせて、ゴザを編むつもりであるという。ナツはこれまでも身近な友人などを連れてツバルを旅してきたが、今回は広くウェブサイトにてともにナヌマンガに滞在する人を募集している。これまでにナツはウェブサイトで島の自然や暮らしについて写真と文章で発信してきたほか、写真展や講演会なども積極的に行ってきた。しかし、それではやはり伝えられるものに限界があり、島での経験を共有したいと考えて、広く募ったという。4人から問い合わせの連絡がきたが、3ヶ月以上日本を離れるという点が難しくて今回は実現には至らなかった。しかし、今後も工夫しながら続けていきたいという。

彼女は日本の人々にツバルのことを伝えるだけではなく、日本で「島の人たち方式」を実践し、「日本をもっとツバルにする」ことを目指してきた。ツバルでは多くの人々の世話になり、自分を家族のように受け入れてもらい、ともに暮らしてきた。こうしたツバルの人々の他者を受け入れる姿勢を日本でも実践していくという。例えば、ナツは「家」という壁を越えて子どもの世話をしあう輪を広げようと模索してきたり [もんでん 2010: 205]、京都を訪れる友人がいれば当たり前のように自分の家に泊まらせて一緒にご飯を食べるなど、日本においてもできる範囲で実践しようとしてきた。こうしたことは、ツバルの人々の価値観に学んだのであろう。ナツは世話になった家族の次のような言葉を印象的に紹介している。「わしらはよく息子たちに言ったもんだよ。与えて、与えて、あたえつくして生きたら、幸せだって。神様はいつもわしらにそうしてくれてるだろ。だから、わしらもそうできるって」 [もんでん 2010: 102]。

ナツは自らの著書の最後に、京都の家の前のしだれ桜の老木とパイツブ島で植えたばかりのティアレという気高い香りの白い花を咲かせる木を対照させながら、次のように美しく表現している。

——どちらの木も、わたしたちがその下にいることを、いつでも、ただ揺れて包んでくれるだろう。どんな人が下にいても、何も言わずに笑って、包んでくれるのだ。
[もんでん 2010: 229]

ナツという人間の生が、この木の描写にすっと入り込んでいる。

謝辞

調査に協力していただいたもんでん奈津代さんに感謝する。

本論の調査にあたって 2017 年度 東京経済大学 個人研究助成費を受けた。

注

- 1) もんでん「ナツ—もんでん奈津代—の子連れの南の島暮らし 天国に一番近い島ツバルにて—」<http://monden.daa.jp/tuvalu.html>。(以下、ナツのウェブサイトに関して初出のみ url をつける)
- 2) Central Statistics Division, Ministry of Finance and Economic Development, Government of Tuvalu (GOT) “Tuvalu-Tuvalu Population and Housing Census 2012.” http://pdl.spc.int/index.php/catalog/50/data_dictionary#page=F7&tab=data-dictionary
- 3) ツバル以外の国籍としては主なものに、キリバス (60 人)、フィジー (49 人)、台湾 (20 人)、オーストラリア (18 人)、中国 (14 人) がある。
- 4) もんでん「作者、「ナツ」について」<http://monden.daa.jp/profile.html>
- 5) この辺りの経緯については、もんでん [2010] に詳しい。
- 6) もんでん「旅のはじまり 1 歳の赤ん坊と日本を脱出するまで」<http://monden.daa.jp/1departure.html>
- 7) ソロモン諸島滞在中に今度はポリネシアの島に行きたいと考えたという。
- 8) もんでん「ナツ—もんでん奈津代—の南の島子連れ滞在記—サモアのびっくり暮らしと子育て—」<http://monden.daa.jp/index.html>
- 9) もんでん「2004 年 出発前序章—なぜ、行くのか。—」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/02prefix.html>
- 10) ツバルは人口 1 万人程度、面積 26km²と世界で最も小さな国の一つである。
- 11) もんでん「2004 年 出発前序章—なぜ、行くのか。—」
- 12) もんでん「2008 年版序章—海に沈むより先に—」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/02prefix2.html>
- 13) もんでん「旅を終えて 大切なあとがき」<http://monden.daa.jp/18end.html>
- 14) 日本では、英語の個人教師、ツバル関係の執筆とトーク、身体障害者の訪問介助などをしながら、生活費とツバルへの渡航費を稼いでいるという。
- 15) もんでん「腕のなかの見知らぬ子どもたち—「ひとの子ども」という概念の特殊性 1—」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/kids01.html>
- 16) もんでん「子どもの服は村で共有—「ひとの子ども」という概念の特殊性 2—」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/kids02.html>

daa.jp/01tuvalu/kids02.html

- 17) もんでん「腕のなかの見知らぬ子どもたち―「ひとの子ども」という概念の特殊性 1―」
- 18) 大日向雅美「3歳児神話を検証する2～育児の現場から～」<https://www.crn.or.jp/LABO/BABY/SCIENCE/OHINATA/>
- 19) もんでん「腕のなかの見知らぬ子どもたち―「ひとの子ども」という概念の特殊性 1―」
- 20) もんでん「子どもの服は村で共有―「ひとの子ども」という概念の特殊性 2―」
- 21) もんでん「腕のなかの見知らぬ子どもたち―「ひとの子ども」という概念の特殊性 1―」
- 22) もんでん「ミシンを踏むファータシガ」
<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2016jinmeiroku/02faatasiga.html>
- 23) もんでん「ひとの、美しさは」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/02asenati.html>
- 24) もんでん「ナヌマンガ島の海」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2008nanumaga/05/0503.html>
- 25) もんでん「ナヌマンガ島の海」
- 26) スペースの都合上、転載した文の改行を詰めて、スペースを加えてある。
- 27) もんでん「料理小屋は暮らしの場」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/album03.html>
- 28) もんでん「木を植える大地」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/05tree.html>
- 29) もんでん「木を植える大地」
- 30) もんでん「屋根材を縫う」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2008nanumaga/05/0509.html>
- 31) もんでん「マロソーばあちゃんと森」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2008nanumaga/05/0524.html>
スペースの都合上、転載した文の改行を詰めて、スペースを加えてある。
- 32) もんでん「森と海と子ども」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/08time.html>
- 33) もんでん「木を植える大地」
- 34) もんでん「木を植える大地」
- 35) もんでん「セメント大好き」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2008nanumaga/06/0625.html>
- 36) もんでん「ノニの赤」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/03noni.html>
- 37) もんでん「輝くござ」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/04pikopiko.html>
- 38) もんでん「輝くござ」
- 39) もんでん「ナニセニの死」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/nanumaga07.html>
- 40) もんでん「ナニセニの死」
- 41) もんでん「ござ編み」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2008nanumaga/05/0526.html>
- 42) もんでん「ござ編み」
- 43) もんでん「ござ編み」
- 44) もんでん「ノニの赤」
- 45) もんでん「肌からもらうもの」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2011/01fualia.html>
- 46) もんでん「肌からもらうもの」
- 47) もんでん「セメント大好き」
- 48) もんでん「ツバルの水の歴史」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/injapanwater02.html>
もんでん「首都フナフチの水不足」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/injapanwater03.html>
- 49) もんでん「流れる水のないツバル」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/injapanwater01.html>
- 50) もんでん「とある夜、ガンガン・ボタボタ ああツバル」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/injapanwater04.html>

- 51) もんでん「料理小屋は暮らしの場」
- 52) もんでん「オシエじいちゃんの家」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/slide/slide03.html>
- 53) ナツは具体的な葉のしごき方、縫い付け方、屋根の葺き方についてイラスト入りで紹介しており、物質文化の記録にもなっている。
- 54) もんでん「シンガノじい」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2016jinmeiroku/01sigano.html>
- 55) もんでん「フェロの実1」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2016jinmeiroku/05mouka.html>
- 56) もんでん「フェロの実2」<http://monden.daa.jp/01tuvalu/2016jinmeiroku/05mouka2.html>
- 57) もんでん「フェロの実2」

参 照 文 献

- Besnier, Niko 2009 *Gossip and the Everyday Production of Politics*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Campbell, Ian C. 1998 *Gone Native in Polynesia: Captivity Narratives and Experiences from the South Pacific*. Praeger.
- Chambers, Keith 1984 *Heirs of Tefolaha: Tradition and Social Organization in Nanumea, A Polynesian Atoll Community*. Unpublished Ph. D. Dissertation in Anthropology. Berkeley: University of California.
- Hau 'ofa, Epeli 2008 *We Are the Ocean: Selected Works*. University of Hawaii Press.
- Kennedy, Donald Gilbert 1931 *Field Notes on the Culture of Vaitupu, Ellice Islands*. Wellington: The Polynesian Society, Memoir no. 9.
- Lazrus, Heather 2009 *Weathering the Waves: Climate Change, Politics and Vulnerability in Tuvalu*. Unpublished Ph. D. Dissertation. University of Washington.
- 荒木晴香 2012 『饗宴の民族誌——ツバル・ニウタオ島社会の生活と「ゆたかさ」』 博士学位論文、広島大学。
- 大野哲也 2012 『旅を生きる人びと——バックパッカーの人類学』 世界思想社。
- おぐに あやこ 2000 『ベイベーパッカーでいこう！——赤ん坊とザック担いでスペインの旅』 日本評論社。
- クリフォード, ジェイムズ/ジョージ・マーカス (編) 1996 『文化を書く』 春日直樹ほか訳, 紀伊國屋書店。
- 小林 誠 2018 『探求の民族誌』 御茶の水書房。
- 長友 淳 2013 『日本社会を「逃れる」——オーストラリアへのライフスタイル移住』 彩流社。
- もんでん奈津代 2008 『ツバル語会話入門』 キョートット出版。
- 2010 『子連れ南の島暮らし——南太平洋のゆるーり子育て体験記』 人文書院。